

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 第	号
------	-----	---

氏 名 剣持 卓也

論 文 題 目

(英文論文の場合は、( ) 書きの和訳を付すこと。また、英字の大文字、小文字も論文題目と合わせること)

**Effects of horticultural therapy on future perspective in patients with schizophrenia in chronic stage**

(慢性期統合失調症患者を対象とした園芸療法の効果に関する研究：  
患者の未来展望に与える影響)

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	千島 亮
	名古屋大学教授	飯高 哲也
	名古屋大学教授	寶珠山 稔

精神科病院に入院する慢性期統合失調症患者を対象として植物を育てる要素を含む園芸療法が、慢性期統合失調症患者の未来展望や希望、精神症状に対し、どのような影響を及ぼすのか明らかにすることを目的として研究を実施した。23名の対象患者について園芸療法介入群には毎週1回、計11回の集団園芸療法による介入を行った。園芸療法では野菜の栽培を行い、収穫までの間、水やり、施肥、収穫、試食を行った。介入群および園芸療法を行わない対照群にはともに従来の作業療法を実施した（週に2時間程度、グループでの運動やレクリエーション、手工芸等）。介入群には園芸療法実施前後、対照群には対応する期間を空けて2回、陽性・陰性症状評価尺度(Positive and Negative Syndrome Scale: PANSS)、Beck Hopelessness Scale (BHS) および The Schizophrenia Quality of Life Scale 日本語版 (JSQLS) を実施し比較した。研究参加者は(36~64歳、介入群：男性4名、女性7名、対照群：男性4名、女性8名)となった。PANSS5要素の下位項目において不安・抑うつが介入群において有意な改善が見られた(P=0.011)。認知の項目でも介入群において改善傾向が見られた(P=0.051)。BHSおよびJSQLSでは2群間に差は見られなかった。


本研究では、園芸療法と作業療法を組み合わせた介入によって慢性期統合失調症患者の抑うつ・不安が軽減された。一方、園芸療法が慢性期統合失調症患者の希望のなさやQOLには有意な変化が認められなかった。本研究参加者を含め、入院をしている慢性期統合失調症患者は入院期間が長期(介入群、対照群ともに10年以上)となっていること、両群参加者のクロロプロマジン換算服薬量は800mgであり中等度以上の症例群であった点が影響している可能性が残った。園芸療法に関する量的比較研究は少なく、その効果を慢性期統合失調症患者において示した点で重要な報告と考えられた。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 長期入院中の慢性期統合失調症患者において、園芸療法を含めた介入は不安・抑うつの軽減効果が認められた。
2. 介入群患者においても希望やQOLに関する測定項目に有意な変化は認められず、中等度以上の慢性期統合失調症患者における本療法の効果は明らかではなかった。
3. 園芸療法の効果に関する量的な比較研究は国内外においても未だ少なく、知見の報告と蓄積の点での意義がある。

以上の理由により、本研究は博士(リハビリテーション療法学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※第	号	氏名	劔持 卓也
試験担当者	主査 千島 亮	名古屋大学教授 	名古屋大学教授 飯高 哲也	名古屋大学教授 寶珠山 稔
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 園芸療法の統合失調症における治療的役割について</li> <li>2. 実験デザインと統計処理方法について</li> <li>3. 抑うつ/不安尺度得点の改善理由について</li> <li>4. 実験結果の統合失調症における特異性について</li> </ol> <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、リハビリテーション療法学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				